

第二の故郷, イギリス

同志社大学心理学部 助教

菊谷まり子 (きくたに まりこ)

私が2004年の10月からおよそ7年間滞在したイギリスのエセックス大学は、ロンドンの中心から北東に100キロほどいったところにあります。1965年に創設されたこの大学は大きな公園の中に位置し、敷地内には広い芝生の広場や湖があって自然が豊かです。イギリスの高等教育の期間は学士が3年、修士が1年、博士が最短3年と、日本よりもかなりコンパクトです。私は日本の大学で社会福祉を学び、心理学には以前から興味があったものの基礎をしっかりと学んだことはありませんでした。そこで修士課程として心理学の基礎を1年間で学べるコースを運営していたエセックスへの留学を決めました。かねてからの憧れであったイギリスに1年間滞在し、修士号を取得するだけの予定で出発したのが、縁あって博士課程に進むことができ、さらに2年ほどポストドクの研究もすることができました。

エセックス大学は留学生が多いことで知られており、ヨーロッパはもちろん、中東やアジアからも多くの学生が来ていました。学生の年齢も様々で、特に修士課程以上には年齢が上の人も多く、実に多種多様な文化背景をもつ人々と交流することができました。私が仲良くしていた友人たちの中にも、ギリシャ人、ベルギー人、中国人、インド人などがおり、結婚して子どもがいる人もいました。友だちが何気なく話してくれる事柄のなかに、それぞれの出身国の歴史や文化が反映されていたりする

のが非常に興味深く、またそこから学ぶことも多かったため、今振り返ると留学の一番の収穫はコーヒープレイクの時に友人たちと交わした会話なのではないかと思ってしまうほどです。

とはいえ、研究活動もとても充実していました。エセックス大学の心理学部はイギリス国内でも非常に評判が高く、一流の研究者が多くいました。その中でも、私の修士・博士課程を指導してくださったロバーソン教授は研究業績だけでなく人柄も素晴らしい方で、私は彼女のもとで顔認知や表情認知に関する研究を行ってきました。先生はホームパーティーを開いてくださったり、ご家族を紹介してくださったりと、仕事以外でもお付き合いくださいました。先生を含め、私の友人たちは家族で過ごす時間をとても大事にしており、プライベートと仕事のけじめをしっかりとつけていました。そんな人たちに囲まれて生活する中で、私も自然とけじめをつけられるようになった気がします。

研究生生活は忙しかったものの、優れた研究設備と環境にとっても助けられました。30室ほどあったコンピュータつきの小さな実験室はいつでも使用可能でしたし、学部生はコースクレジット取得のために積極的に実験に参加してくれました。また実験予約がウェブでできるシステムもあり、アポイントメントの管理も簡単でした。研究発表も盛んで、2週間に1回は外部の研究者が来るセミナーがあり、同じ頻度で学部内の研究者の



Profile—菊谷まり子

エセックス大学心理学部博士課程、同大学心理学部研究員を経て、2013年4月より現職。専門は認知心理学。論文はConcerns about losing face moderate the effect of visual perspective on health-related intentions and behaviors。(共著, *Journal of Experimental Social Psychology*) など。

発表会もあって、とても刺激になりました。

幸運なことに、私はよい仲間や指導者に囲まれて充実した生活を送ったので、ドラマチックな苦労話はありませんが、あえて挙げるならハウスシェアとアルバイトでしょうか。イギリスでは一軒家を数人で借りてシェアするのが一般的で、貧乏だった学生時代は私もそうしましたが、騒音や掃除の問題などはもう二度と味わいたくない苦い思い出です。アルバイトは博士時代に学内のコンビニでレジをやっている、朝の7時頃から4時間程度、週4回ほど働いていました。さらにティーチングアシスタントなどもやっていたのでとても忙しい日々でした。

イギリスにいた時は先の見通しが立っていないことが多く、未来への不安が多くありました。しかしその分、今できることをやるのに必死になれた気がします。この「必死さ」をこれからも忘れず、色々なことに勇敢に立ち向かっていきたいと思う今日この頃です。